立ちどまる

秋山達子

夏の昼さがりのひととき、木造の古びた洋館のうしろから、少女が一人、スキップしながらあらわれた。そして少女はふと立ちどまる。砂まじりの乾いた小道の両側に、雑草の間で松葉ボタンが赤やピンクの花を咲かせている。そのかげになにか動いているものがある。なんだろう、あっ、とかげだ。青緑色の背中に気持ちが悪いほどキラキラと光るコバルト色の線が通っている。草かげにじっとひそんで、神経質にピクピクと体を動かしていたが、やがて敷石の下にすばやくもぐりこんだ。まだしっぽがみえている。しかし、まばたきをする間にそれもすっかり姿を消して、草いきれのする庭はまたもの音一つなく静まりかえった。

少女は立ちつくしたままで、じっと敷石のあたりを眺めている。とかげはもうでてきそうもない。昨日見たとかげはしっぽがもっと短かかった。とかげたちはどこに住んでいるのかしら。石をひっくり返したら、とかげのおうちが見えるかしら。あの二匹はもしかしたら、とかげの王様と女王様かもしれない。とかげの宮殿は銀色と青緑色で光っていて、ガラスのお城のようにきれいだろうな。とかげの宮殿の入口は、誰にもわからないようにかくしてあるのだ。みんながおもしろがって掘り返すと困るから。だから、とかげはあんなに用心深いのだ。地面の下の世界では、コバルト色の馬車が、銀色の馬具をつけた白い馬にひかれて走っている。塔のたくさんあるすき通ったお城、女王様はどんな冠をつけて、どんなおきものを着ていられるのだろう。少女の真昼のファンタジーは、どこまでも発展する。白うさぎの家来や、かえるの侍従がおじぎをしたり、おしゃべりをしたり、並んでラッパを吹いたりする。塔の上には青と緑のとかげ国の旗がひるがえり、王様と女王様はいま馬車に乗って外から帰ってこられたところだ。

やがて、少女はくるっ、くるっとかかとを中心にして、二

度ほど円を描いてまわると、ふくらんだスカートを楽しそうにつまんで、あたりを見まわし、とかげの王国への考察はしばらくやめにして、またスキップしながら門の外へ出ていった。誰もいなくなった庭では、どこの家の飼猫か、白い猫がのそのそと小道を横ぎり、ちょっと立ちどまって、あたりを見まわし、隣家の垣根をこえて消えた。

子どもも、とかげも、猫も、まったく無邪気に立ちどまり、それぞれの世界で静かに時をすごすことを知っている。しかし、私たち大人は、もう長いこと、なにげなく立ちどまり、自分の時間をもつことを忘れてしまっているような気がする。右を見ても、左を見ても情報の氾濫で、いくら学んでも、学びきれないほどの知識が、学校でも、街でも、語られ、教えられる。くつろぎの間である家庭の茶の間にも、テレビが進出して、娯楽や、スポーツばかりではなく、世界のすみずみでおこりつつあるニュースを伝え、文化的な行事や新しい知識を紹介する。身近なお買物ニュースから、月世界探検まで、アジアや中東の複雑な政治状況から、今年のファッションの傾向まで、一日中テレビの前にすわっているだけでも、ものすごく進歩向上したような気がするほどである。

こんな時代に、ほんの少しの間でも、立ちどまることは、時間の無駄となり、足ぶみをすることは退歩につながり、文化の衰退に結びつくように思われる。進め、進め、まわり中の人が競走でかけっこをしているようで、うかうかしていると時代に乗り遅れそうになる。現代に生きる私たちは一瞬でもなにもしなかったり、考えなかったりする暇をもたない。よく働き、よく学んで、時を惜しんで生産し、創造することはすばらしいことであり、またよく遊び、なにごとも進んで経験し、できるだけ多くのことがらにふれることはよいことではあるけれども、しかし、このまま前進をつづけていったら私たちの運命は結局どうなるのであろうか。いつかはすべてを知りつくして、もっとも高い文化の世界を築きあげることができるのであろうか。それとも情報や知識の渦に巻きこまれ、進歩の競走に息をきらして、破滅の淵におちこむのであろうか。

悪魔メフィストフェーレスは、ファウスト博士に対して、なんでも望むことを経験させるという約束をする。しかし、もしファウスト博士が、生の探究にあきて「瞬間」にむかって、「立ちどまる」ことを願うことがあれば、魂を悪魔にゆずりわたさなければならない。現代はちょうど、メフィストを連れたファウスト博士の冒険そのものである。一時の休止

は悪魔のかけに負けることであり、その瞬間に暗黒の地獄の深淵が口をあけて待っている。私たちは強い外界からの刺激に慣れきって、なにもせず、なにも考えない時が十分間も続くと、もうどうしてよいかわからず、次にすることを探して、ただうろうろするばかりである。

「時よとまれ、かくも汝は美しき」というファウスト博士のあの有名な言葉。悪魔に身を売りわたしても、現世の時をとめ、瞬間にとどまることを願った時、その瞬間は永遠の時として残り、博士は天国の声をきいて、救われることができた。

時には日常の約束の中にある時間、人と待ち合わせをしたり、勤務をしたりする時計で計ることができる外界の時間と、このような日常の時をとめた瞬間にあらわれるもう一つの時間、ふと立ちどまり、自分の瞬間をもった時の、内界の時間とがある。計ることのできない内なる時間は、永遠の時間とよぶこともできるかもしれない。それはただ外の時間をとめた時にのみ感じられる大事な時間なのだ。

このごろは、子どもたちでさえ、自由に立ちどまって、自分の世界を楽しむことが少なくなってしまった。お伽の国はだんだん狭くなって、宮殿も馬車も現実離れしたおろかな昔話になってしまった。汽車も自動車も飛行機も、できるだけ早く走ることが進歩につながり、それにつれて世の中の回転もますます早くなりつつある。そして増大する情報の整理に大勢の専門家が走りまわり、政治や経済を調整して、理想的な世界を作ろうとしている。しかし、皆が努力すればするほど、世の中の動きは早くなり、情報はますます多くなる。だから、子どもだからといって、のんびり自分だけのファンタジーの世界で遊んではいられない。小さい時から、世界の動きを学ぶように教えられることになる。

しかし、私たちの生活はこれでよいのだろうか。前へ、前へと少しでも早く進もうとする現代人は、幸福というものを知らないのではないだろうか。私たちは幸福がいつもずっと先の方にあるように思っているが、ほんとうは後から追いかけてくるものなのだ。だから、私たちが時には立ちどまって、ふり返り、待ってやる時にだけ、幸福はやっと追いつくことができる。「立ちどまる」それは幸福であることを知る唯一の方法なのだ。

（大正大学）